

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長 花崎 和弘
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長 杉浦 哲朗

開院30周年に向けて

高知大学医学部附属病院長 杉浦 哲朗

本 院は昭和56年10月12日に高知医科大学附属病院として開院して以来、今年10月で30周年を迎えます。その間、地域に密着した基幹病院として急性期の患者さんに全人的医療を提供してまいりました。また同時に、医療人の育成、高度先進医療の提供、医学研究の成果を医療に還元するという使命を持って教育・研究にも積極的に取り組んでまいりました。平成15年10月1日に高知医科大学と高知大学が統合し、高知大学医学部附属病院となり、平成16年4月には国立大学法人の病院として再出発しました。その後も職員の福利厚生に配慮しつつ、医療の質と安全の確保や病院内のエネルギー消費抑制、大規模災害に対する危機管理体制の構築にも力を入れ、「地域から頼られる病院」として医療の機能の充実をはかっています。

我 が国の医療は現在大きな変革期に立っています。病院には安心で安全な医療が求められる一方、高齢化社会の到来や医療の高度化により医療は複雑化し、医療現場は過剰な臨床業務に追われています。しかし、経済は低成長時代となり、質の高い医療を効率よく提供することが医療機関には求められています。そこで高知大学医学部附属病院では、多種多様な医療スタッフが個々の専門性を活かしながら、業務を分担・連携し医療を提供する「チーム医療」を推進してきました。今回、高知大学医学部附属病院規則に「特定の目的のために編成されたチームを置くことができる」という項目が新たに追加され、従来からあった10チームに2チームが新設され計12チームで職種横断的な活動を行って

います。さらにチーム医療の重要な構成員であるコメディカル職員の増員及び常勤化を推進し、各医療職種の負担軽減により労働環境も改善をはかっています。専門性の高い多職種によるチーム医療に基づいた良質で効率的な医療の推進は病院運営に大いに役立っています。

30 周年を迎える年に非常にうれしいニュースが届きました。高知大学医学部の悲願であった附属病院の再開発が平成23年度予算において認められました。これも一重に職員の皆様方のご理解とご協力の賜物と深く感謝しております。本再開発の基本理念は「地域に密着した先端医療の推進と高度医療人の育成」です。本病院再開発は医学部再開発と連動しており、特に先端医療学推進センターが中心となって推進するトランスレーショナルリサーチは、地域医療の発展に寄与するだけでなく、医学教育にも貢献するものと期待されます。また「患者中心の医療の実践」の目的からも新病棟の新築と既存病棟の改築は患者さんの療養環境の更なる改善と患者サービスの向上につながるものと確信しております。

30 周年を迎えます本院は、平成23年10月15日高知新阪急ホテルにおいて記念式典、基調講演会、そして記念祝賀会を予定しておりますので、一人でも多くの職員の方々にご出席いただき30周年を祝っていただければ幸いです。今後とも職員一体となって医療の質と安全の確保に努め、社会の期待に応えるべく邁進していきたいと思っております。職員の皆様の変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

新任の挨拶



外科(二)

おりはし かずまさ
渡橋 和政 教授

4月1日付けで広島大学より赴任してまいりました。心臓血管外科、呼吸器外科、形成外科を担当させていただきます。これまで心臓血管外科で緊急性の高い大動脈疾患や長期成績が問われる僧帽弁形成術などを中心に取り組んできましたが、

その中で高齢化や複合病態によるリスク拡大、要求される水準の上昇、救急体制の問題などを切実に感じてきました。これらをふまえて今後私が目指したい方向は以下のとおりです。

学生・研修医教育で強調したいのは、「どの科に進んでも循環器救急を念頭に置いて診療しないと問題を引き込みかねない」ということです。それを理解するため、研修中にぜひ当科を一度は回ってほしいと思います。外科医教育では、自分の領域しかわからない偏狭な外科医でなく、広く研修し足場の広い外科医を育てたいと思っています。

命にかかわる病気では特に患者さんやご家族の理解がいかに大切かを感じます。患者さんの時間の中で私たちが関与できる時間は非常にわずかです。また受診しない限り発症前に病気を見つけて治療することは不可能で、緊急事態を回避するために必要なのは、患者さんへの啓発、開業の先生への情報提供です。さまざまな手段でこの点に取り組みたいと思います。

大学は、発表されたものを取り入れるだけでなく新たな診断・治療の手法を創り出す場所です。外科に要求されるのは『安全で確実な治療』です。現在のレベルよりさらに安全性を高め、治療の効率や確実性を高める方法を開発することに力を注ぎたいと思います。

しかしこれらを実現するためには多くの症例が必要です。地域の拠点病院との提携に加え、各地域の先生方とのつながりを深め、大きく強い外科教室に育てることを目指したいと思います。どこまでできるかわかりませんが、一人では何もできないことだけははっきりしています。皆さんに支えられ一緒に前進してはじめて実現できることと思います。ご支援、ご理解をいただければ幸いです。



医学部・病院事務部長

田中 一彦

平成23年4月1日付けで、事務部長として、大阪大学医学部附属病院から赴任してまいりました。

高知大学での勤務は初めてではありませんが、過去大阪大学、福井大学、神戸大学と3大学の医学部・病院に勤務した経験を活かし、学部長、学系長、病院長のもとで皆様方のご協力を得て頑張

りますのでよろしくお願いいたします。

また、今年度4月からは事務の責任所在の明確化及び効率化を図るため各キャンパスにおける事務の一元化のための事務組織の改編がなされ、岡豊キャンパスにおいて医学部・病院事務部も総務企画課・会計課・学生課・医事課と4課体制となったものであり、事務部一丸となり、医学部及び病院の使命である教育・研究・診療・地域貢献の充実はもちろんの事、今年度から始まる病院再開発や医学部の再開発計画等々に向かって頑張りますので、よろしくお願いいたします。



医学部・病院事務部 総務企画課長

池本 強

私は、高知医科大学病院創設期から約22年間勤務の後、統合・法人化後の高知大学で新たな大学づくり、研究の推進及び地域の振興等を担

当してまいりました。現在の総務企画課は、総務、人事、研究、各種推進事業、先生方の活動支援等を担当して

いますが、学内、学外の連携を強化するとともに、より効果的な業務の遂行に努めています。

大学の使命・役割と機能を果たし、高知大学が拠点となり「先端医療の推進と高度医療人の育成」をはじめ社会のニーズに、事務担当者も教職員一丸となって取り組んでいきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

また、「まちづくりひとづくり」をテーマに社会活動を行っています。お気付きの点がありましたら、ご連絡をお待ちしています。



医学部・病院事務部 会計課長

沖 淳一

平成23年4月1日から会計課長として帰って参りました。本院では4年ぶりにお世話になります。この4年間で本院の急成長はめざましいものがあり、特に病院収入増には驚かされております。これらは病院スタッフである皆様がそれぞれ日々ご努力した賜物であると思っています。

さて、第2期中期目標・中期計画の2年目に当たります本年度は、念願の病院再開発がスタートします。ご存

じのとおり、この病院再開発(施設整備)の費用のうち9割は国から借入した後、25年かけて返済していく仕組みとなっており、この借金を返済していく上では『健全な経営』が必要不可欠です。『経営』とは『収益』や『コスト』であり『サービス』でもあります。地域の方々から、今以上に信頼される病院としての『サービス』を提供することで、きっと経営も安定することでしょう。また、コストも意識しながら無駄を省き、必要なものには投資することで本院をもっともっと良い病院にしていきたいと思います。

私自身も学部長、病院長のもとで、病院収入の増、経費節減等に取り組み、微力ながら頑張っていく所存ですので、どうぞよろしく願いいたします。



医学部・病院事務部 学生課長

明神 一夫

このたび7年ぶりに朝倉キャンパスから医学部に帰ってまいりました。以前に比べ学生課職員は削減され、家庭医療学やがんプロフェッショナル養成プラン等に関する会議などが増え、業務量の多さには驚いております。また、本年度に事

務組織も改組され学務部学務課から医学部・病院事務部学生課と入試課入試室も学生課入試室と変更となり守備範囲も広がっております。

新任課長の決意として、大学教育の質の向上・充実のため、特に大学院(博士課程)志願者の拡充に向けた取組みを行っていきたくと思います。皆さんとの「和」を大切に、これまでの経験を活かし医学部の発展に少しでも寄与していきたくと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

事務組織の改編について

総務企画課

昨年度において、全学的な事務組織改編の検討が行われ、平成23年4月から新たな事務組織が設置されました。今回の事務組織の改編に係る主なコンセプトは、岡豊、物部及び各キャンパスにおける事務の一元化です。

このコンセプトにより、医学部・病院事務部においては、総務部、研究協力部及び学務部に属していた「教員支援課岡豊室」、「研究協力課岡豊室」、「岡豊学務課」及び「岡豊入試室」を医学部・病院事務部の所屬としました。

これにより、岡豊キャンパス事務部の一元化と業務責任の明確化が図られ、医学部長、医療学系長及び附属病院長への支援体制が強化された事務部に生まれ変わりました。

病院組織の改編について

総務企画課

高度化、専門化する医学・医療の変化と共に患者及び社会が大学病院に求めるサービスの多様化に伴い、病院内には多くの組織が設置されました。

その都度、医学部附属病院の規則等を改正、制定してきましたが、組織の位置づけが統一されていないこと、また、病院規則と組織設置規則の関係が明確でないため、見直しを行いました。主な変更点は次のとおりです。

- 「中央診療施設」は診療科から独立し、特定の診療を専門に行う施設とし、「特殊診療施設」を廃止し、「透析部」「子どものこころ診療部」と医療サービス課(現医事課)の栄養管理室から独立した「栄養管理部」を新設。
- 「医療安全管理施設」は医療安全及び感染対策を行う施設として新設。
- 「診療支援施設」は直接診療は行わず間接的に診療・教育・研究を支援する組織として新設。

新採用特集



眼科

視能訓練士

西村 真由(にしむら まゆ)
高知県高岡郡四万十町出身

本年度の4月より視能訓練士として眼科に配属された西村真由です。

高知大学医学部附属病院は、「高知県では誰もが知っている!」と言っても過言ではないほど、認知度が高い病院です。

私は、近所の方が何かしら重い病気や怪我をすると、遠くても高知大学医学部附属病院へ足を運ぶ姿や体験談を幼いころから見たり聞いたりしていました。そのため私は、本病院に対する憧れと少しでも高知県民の役に立てるのであれば…という思いが強くなっていきました。そして今年4月に、その念願が叶い視能訓練士として本病院の眼科で働くことになり大変嬉しく思っています。

現在は、患者さんに対して気配り、目配り(眼科だけに…)をモットーに日々奮闘中です。また、優しい医療スタッフの方々に患者さんへの接し方や検査技術のご指導をいただいています。

今後は、多くの経験を積み、信頼される視能訓練士になれるよう日々努力していきます。



メディカルサプライセンター ME機器管理室

臨床工学技士

佐々木 悠人(ささき ゆうと)
広島県広島市出身

この度高知大学医学部附属病院・メディカルサプライセンター・ME機器管理室に就職した臨床工学技士の佐々木です。

私は広島県出身ですが、大学が香川県だったので、同じ四国内にある本院に大変興味を持っていました。私が本院を志望したのは、私が大学で学ぶなかで最も重要視していた地域医療の重要性と本院の理念である『最新最高水準の医療を地域医療に活かし提供する』というところが一致していたことで感銘を受け、本院で地域医療に貢献したいと思いました。また、業務内容が機器管理以外にも心カテ・人工心肺・透析とMEとしての業務が多岐にわたっており、一種の業務に偏ることなく様々な業務に携わることができる考えたからです。

今後の抱負として、まずは院内のMEとしての信頼を得ることができる様に努力することです。更に、ME機器管理室の業務以外にもオペ室の業務も行っていきたいと思っています。

右も左もわからない新米ですがよろしく願います。



放射線部

診療放射線技師

林 直弥(はやし なおや)
香川県観音寺市出身

今年度から診療放射線技師として高知大学で働かせていただくこととなりました。

私が、高知大学医学部附属病院に就職した理由は、三点あります。

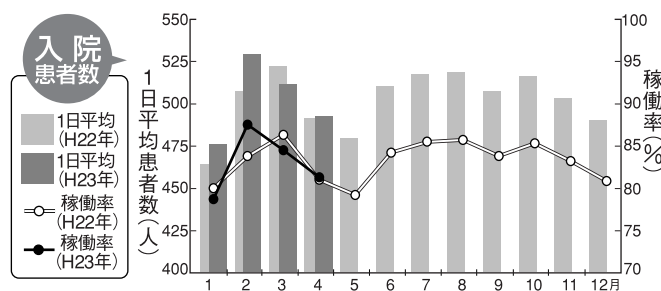
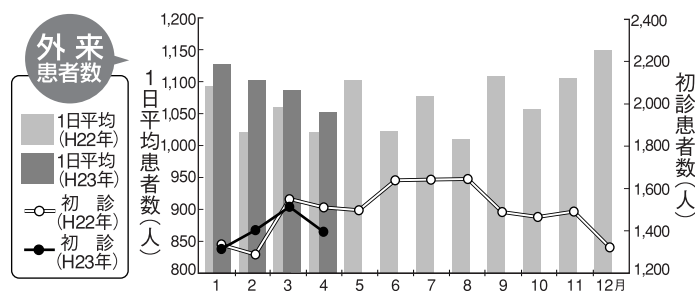
最初に、出身地である香川県(観音寺市)から最も近いところにある大学病院であり、高知県のみならず地元の医療にも貢献したいと考えた点です。

次に、最先端の医療機器と技術を有し、専門性の高い医療を提供することができると考えました。最後に、患者さんの側にたった医療サービスを提供できる職場であると考え、高知大学を志望しました。

今後は、医療技術や医療サービスの向上はもとより、患者さんにとって安心と安全を常に提供できる診療放射線技師を目指して、日々努力してまいります。

どうか、ご指導・ご鞭撻の程よろしく願います。

診療状況



編集後記

瀬尾宏美教授(総合診療部)の後任として本年度の編集委員長を仰せつかりました。できるだけ明るい話題や日常診療に役立つ情報の多い、即ゴミ箱行きにならないような病院ニュースをお届けしたいと思っています。そのためには幅広い層から支持される新ジャンル欄にも挑戦しながら、斬新な紙面作りを心がけたいと思っています。1年間何卒宜しくお願い申し上げます。未曾有の被害をもたらした東日本大震災から

約3か月が経過しました。復興を目指した被災地の皆さんの奮闘ぶりや復興のspeedは海外でも高い評価を得ており、同じ日本人として誇りに思います。近い将来の発生が危惧される南海地震対策として今回の震災は従来の想定外を想定内に変えてしまった大規模災害でした。私たちも負けてはいられません。今こそ全職員が一丸となって南海地震を主眼においた災害医療対策に知恵を絞り、本院の存在感を高めていく時です。(文責:花崎 和弘)